大名屋敷の表門を泥絵で見る

泥絵とは、ブリタニカによると、次のような説明がされています。「江戸時代末期頃に流行。泥絵具は粘土などを顔料と混合した泥状の絵具で，粗悪ではあるが廉価なため芝居の看板，書割りなどに用いられた。したがって遺品は少いが，近年になって注目されはじめた土佐の絵金 (えきん) ，すなわち弘瀬金蔵の芝居絵屏風に泥絵が多い。」

長屋門を追いかけていたら大名屋敷の表門がその基になっていると推測されるので、大名屋敷の表門を調べてみました。現在東京（江戸）に残っている江戸時代の大名屋敷の代表的表門を次にあげます。

この件は以前レポートしたが上野の国立博物館内にある「**鳥取藩池田家上屋敷表門（黒門）」、東大の赤門「加賀藩前田家上屋敷御守殿門（赤門）」そして山脇学園の門として**「岡崎藩本多美濃守忠民の江戸上屋敷の表門」などがあります。

※1

その他都内には武家の表門ないしは武家の長屋門として残されています。

そんな時、「大名屋敷の表門を泥絵で見る」※2という本が目につきました。当時幕府は大名や武士の格式に対して門構えの形式（基準）をもうけていました。その形式が泥絵の中に見られるのです。

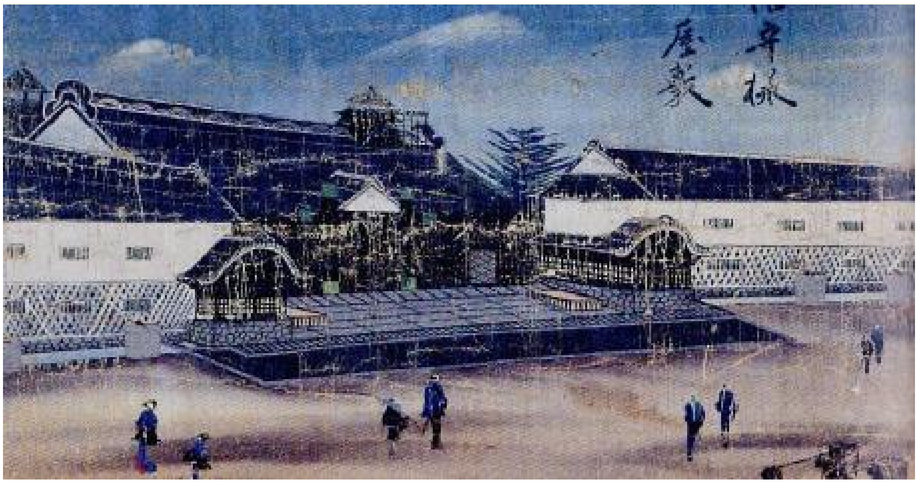
江戸の中期以降江戸には全国の各藩の上、中、下の屋敷が建ち並んでいました。その数は全国に300 藩程あったそのですので、棟数を略算すると300×3 軒＝9000 軒。これに町人たちの住まいが合わさって、100 万人もの人口があったらしいです。

現在の都市でいうと100 万強の人口は東京都は別格として、10 位がさいたま市、11 位広島市、12 位は仙台しなどですので、当時の江戸の規模や賑わいが想像できます。

前述した「**鳥取藩池田家上屋敷表門（黒門）」の泥絵も国立博物館に保存されています。本での絵をみると現在の表門と様子が違い、中央の屋根付**

きの門がなく柱と梁を組み門扉が建てこんであるように見えます。左右には唐破風の屋根の番所があり二階建ての長屋が延びています。この様子は表門が火災にあい再建にさしてはこの絵のように作ることが定められていました。

現在の国立博物館の表門は幕府の権勢が落ちてきたころ作られ移築に際しても手が入れられたようです。



※2「鳥取藩池田家上屋敷表門(黒門）」

注：※１国宝・重要文化財（建造物）サイトより

※2「大名屋敷の表門を泥絵で見る」平井聖、浅野信子著、東京 学研

植木　22.7.6